

(11) 前期実践より明らかになった成果と課題

(11) 前期実践より明らかになった成果

①授業の中で活躍する 児童の姿がたくさん見られた



(11) 前期実践より明らかになった成果・心得

②【ジョイント学習】の捉えが拡張し、教師が子どもを深い学びへと誘う視点が増えた。

【ジョイント学習】という言葉は、昨年度では、授業と授業、家庭と授業をつなぐというイメージが強かったが、体育科を通して深めてきた今年度の【ジョイント学習】では、

(10)前期実践から系統立てた、体育科における【ジョイント学習】でも示した通り、教師が子ども個人の意識のつながりや授業内での子ども同士のつながりを持たせるために、授業創りから、授業中において常に意識しておかなければいけない手立てであるという考えに至った。

③体育科学習を行う上での心得

コツを試して児童の動きを変えていくものをポイントとしてまとめていくことが大切である。

身につけさせたい技術を目標に設定するが、当該学年の枠を超えて技を突き詰めていくことはねらわない。

(11) 前期実践より明らかになった課題

① 全体の目標と、個別最適化学習を体育科の授業でどう両立するか。

課題を見付け、その解決に向けた学習過程とは、運動や健康についての興味や関心を高め、運動や検討に関する課題を見付け、粘り強く意欲的に課題の解決に取り組むとともに、自らの学習活動を振り返りつつ、課題を修正したり、新たに設定したりして、仲間とともに思考を深め、よりよく課題を解決し次の学びにつなげることができるようにすることを示している。(指導要領p19より一部抜粋)

昨今言われている個別最適化学習の視点で、体育科の学習においても個々やチームによる課題を自分達で見付けさせ、その解決方法を個人やチームで追及していくような授業をデザインすることで、本校研究が求める子どもたちの繋がりから新たな課題や学びが生まれそれが果ては体育科学習を楽しみと思える子どもたちの姿に繋がっていくはずである。

② 子ども同士をつなぐペア学習では、何を手立てに対話を生み出せばよいか？

2年「走・跳の運動遊び」、5年「タグラグビー」、6年「ハードル走」では、共通の目標設定により、グループやペアで関わる必然性を持たせて子ども達同士で関わりを持たせることが意図的に仕組めたが、4年生「マット運動」においては、どのような仕掛けにすれば、対話を生み出すことができるのか？